

「マクベス」の宇宙

小島信之

「マクベス」の悪の領域の迫真力は真に絶大であるが、終幕近く、イングランドの場面に移ると、俄然、雰囲気が明るくなってくる。そして、あの宇宙的とみえた凄まじい悪の氾濫も、その実にはスコットランド一国内に限られていたことに気附かせられる。魔法にも似た芸術の効果である。

このイングランドには慈悲深いエドワード饑饉王が君臨している。彼は奇蹟的に evil (悪、具体的には、るいれき) を治す「聖寵」に充たされた「聖人」なのである。

Malcolm.—Comes the king forth, I pray you?

Doctor. Ay sir; there are a crew of wretched souls

That stay his cure: their malady convinces

The great assay of art; but at his touch——

Such sanctity hath heaven given his hand——

They presently amend.

Malcolm. I thank you, doctor.

Macduff. What's the disease he means?

'Tis call'd the evil:

A most miraculous work in this good king;

Which often, since my here-remain in England,

I have seen him do. How he solicits heaven,

Himself best knows: but strangely-visited people,

All sworn and ulcerous, pitiful to the eye,

The mere despair of surgery, he cures,

Hanging a golden stamp about their necks,

Put on with holy prayers: and 'tis spoken,

To the succeeding royalty he leaves

The healing benediction. With this strange virtue,

He hath a heavenly gift of prophecy,

And sundry blessings hang about his throne,

That speak him full of grace. (IV. iii. 139)

(マルカム——陛下はお見えになりますかしら。

医者 え、お見えになります。大勢の憐れな病人が陛下から治療されるのを待っています。その病気はどんな優れた医术も施すべがないのに、陛下がお触りになると——そん

なにもあらたかな力を、神様はその手にお授けですが——
たちまち病人は治るのです。

マルカム 先生、ありがとうございます。

マクダフ その病気というのは何ですか。

マルカム それは悪病といはれるものだ。この親切な国王

は世にも不思議な奇蹟を行はれるので、ぼくは英国に滞留して以来、しばしば拝見した。どうして神の助けを求められるのか、他人の窺い知るところではないが、この奇病に取りつかれて見るも無慙に全身が腫れ上り、膿みただれ、(医者もまつたく匙を投げた人びとを、王は有難い祈禱を唱えながら、ある金貨を病人の頸におかけになつて治されるのだ。そして聞くところによると、この祝福された療法を、代々の王様にお残しになるようだ。この不思議な力とともに、陛下には貴い予言の力がおありになり、その他様ざまの天恵が玉座の周囲に群がつて、陛下が聖寵に充たされていらつしやるのを物語つている。)

この場面は、ちようどマクベスの最も卑劣な残虐行為、即ちマクダフの妻子殺戮という恐るべき知らせが齎される直前なので、その効果は著しく、また含蓄が深い。この英国王の助力によつて、ダンカンの王子マルカムがその母国の evil を治す医者役目を果たすというのは、単なる比喻を超えた事柄である。

Meet me medicine of the sickly weal,

And with him pour we in our country's purge
Each drop of us. (V, iii 27)

(この病める国を治すお医者に会い、その人と共に、国家の病毒を除くため、われわれの血を一滴残らず用いよう。)

と、マルカムを迎えようとするスコットランドの一兵士は希望に燃えて叫んでいる。

では、「病める国」スコットランドの状況はどうであろう。

Macduff. Stands Scotland where it did?

Ross. Alas, poor country!

Almost afraid to know itself. If cannot
Be call'd our mother, but our grave; where nothing,
But who knows nothing, is once seen to smile;
Where sighs and groans and shrieks that rend the
air

Are made, not mark'd; where violent sorrow seems
A modern ecstasy: the dead man's knell
Is there scarce ask'd for who; and good men's lives
Expire before the flowers in their cups,
Dying or ere they sicken. (IV, iii. 164)

(マクダフ スコットランドは相変らずですかね。

ロス いや、いや、情ない国になりました。自分の国をス

コットランドだと認めるのさえ遠慮がちです。母国と呼ぶよりも墓場だといった方が適當です。そこでは無智無感覺の者のほか、誰も一度だつて笑うということがなくなり、空に響く溜息と呻吟と叫喚の聲は、発する人ばかりで、気にかける人はなく、烈しい悲痛がありふれた心持に思はれ、葬いの鐘はそこでは殆ど誰のためかと問はれることもなく、善人の生命は、帽子につけた花よりも早く散り、萎むひまもなしに枯れていきます。

スコットランドをこのような「墓場」に変えてしまつた暴君マクベスは、「悪霊を信仰しているもの」であり、「地獄の犬」であり、「スコットランドの悪魔」である。これに対してイングリッドの王は、「極めて信心深いエドワード」であり、奇蹟を行う能力を神から授かつた「聖寵に充たされている」人であり、「聖王」である。この聖王を頭に戴いているイングリッドが神に極めて近い次元にある善の領域、反対にスコットランドが神に極めて遠い次元にある悪の領域として描き出されていることは明瞭である。前者は超自然の高所に通じているし、後者は超自然の深淵に通じている。しかしこの二つの領域は、国家としては平面上の箇々別々の存在ではあるが、価値の体系からすると、いはば垂直に連続して「マクベス」という一つの広大な宇宙を形成している。この場合、イングリッドといい、スコットランドといい、何れも特定の時空、特定の領域という意味を超えた象徴となつていふことに注意しなければならぬ。

もともと「マクベス」の中で、イングリッドが決定的な役割を演じていることは更めていふ必要のないほど明白なことであるのに、なぜかひとはスコットランドにばかり心を奪はれて、イングリッドの存在を無視しがちのようである。たとえばウォールター・ローレイは次のようにいう。

「シェイクスピアの悲劇は余りにも崇高であり、恐怖すべきものであり、その現実性において余りにも説得力が強いので、人びとは彼の悲劇を道徳の寓話と説明することによつてそれから逃れようとするのである。……だが、ここでわれわれは一種の地震に遭遇するのである。ここではもはや有徳な行為も全く役には立たない。なるほど道徳は否定されてはいない。が、それは大海の侵入によつて呑み込まれ、傍え押しやられているのだ。シェイクスピアの悲劇においては、道徳の教訓は偶然にでなければ眺みとることができない。それは人間よりも偉大なものを取扱つていふ。もろもろの精力と情熱、自然力、苦悩の暗黒な深淵、等々及び中心の火を取扱つている。中心の火——それは文化の薄い被膜を破つて噴出し、荒廃した家々の暗闇を超えて大空に燦然たる光彩を放つ。シェイクスピアは詩人であり、まことの想像力を有している。ので、人間の、この地上における滞在がいかに果敢ないものがあり、その静かな秩序ある習性と、その散文的な話し振りが、いかに感はしいものであるかを知つている。それらのものは、いつ、どんな瞬間に偶然や運命などの作用によつてばらばらに崩壊し、この世が、再び、渾沌の中に緋めくもろもろの力へと投げ出されてしまうかも知れないのである。」

右の一文は、ドーヴァー・ウィルソンが、「マクベス」の説明のうちでも、「これほど啓発的で、これほど満足すべきものを他に知らない」とまで激賞して、その「マクベス」論の結論の位置に掲げているのであるが、これがスコットランド一国だけを指していることは明瞭である。いや、厳密に言えばスコットランドでさえもない。なぜなら、「マクベス」においては、両者は切つても切り離せない有機体として一つの宇宙を構成しているのであるから。

また、なにもわざわざこちらから「道德の寓話」と説明して逃げ出さなくとも、シェイクスピア自身が、その怖るべき領域から親切にもわれわれを救い出してくれている。そして、それは恐怖からの遁走どころではなく、逆にそれに向つての勇敢な前進であり、征服なのである。道德が「大海の侵入によつて呑み込まれ」「傍へ押しやられている」のは、スコットランド一国内のことであり、それも単に一時的の現象にすぎない。「道德の教訓は偶然にでなければ読み取ることができない」どころではなく、むしろ、「マクベス」の本質は高度に道德的であるといえよう。この劇全体が「必然」の道德の完璧な実証なのである。ただ、その道德というのが近代人の考えるものとはよほどスケイルが違ふのである。ハーディン・クレイも「マクベス」が中世の道德劇の伝統と完全に一致するものであることを論証している。

近來の英国ルネッサンス精神に関する諸研究によつて、シェイクスピアのみならず当時の大多数の人びとの世界観の型が、いくらか単純化されているとはいへ、その輪廓において中世のそれ

と全く同一のものであることが確認されるようになった。神への根強い信仰に裏打ちされたその世界観は、また、それ自体が人間の宇宙における位置と、その道德とを示すものであった。それは、あの悪魔が創り出した渾沌を断固として容認しない。神に発する光に照らされて、その闇が征服されんことを祈り、聖寵の助けによつて、神的秩序の再建に全力を挙げて協力する。ダンカン王の弑逆が発見されたとき、バンクウオは、次のようにその立場を決然と表明した。

In great hand of God I stand, and thence

Against the undivulged pretence I fight

Of treasonous malice. (II. iii. 136)

(ほくは神様の大きな御手に身を委ねて、その力で謀反を企む悪人の秘密の駆引に対抗しよう。)

もともと、この劇の冒頭から、悪魔になびくマクベスと、神に向うバンクウオとが並置されていたのであつた。あの惑はしい魔女に対しても、かれはまるでこんにちのわれわれの眼を代表してくれるかのように、冷静に、いはば科学的に観察している。(一幕、三場、三九行)

そして、マクベスへの第二の予言が実現したとき、すでに相手が悪魔の手先にほかならないことを看破して、魔女の予言と正反対に、マクベスの眞の将来をちやんと予言してやつている。

And oftentimes, to win us to our harm,
The instruments of darkness tell us truths,

Win us with honest trifles, to betray's

In deepest consequence. (I. iii. 123)

(それに、われわれを誘惑してしくじらせるために、悪魔の手先どもが真実を語つてきかせ、つまらぬことを正直にいつて人を信じさせて、最も重大な事柄にわれわれを裏切ることもある。)

闇の力が圧倒的に優勢なスコットランドでは、高潔で敬虔なバンクウォオさえも、犇々と迫る悪魔の重圧を感じないわけにはいかない。だが、その場合でも彼は決して神に祈ることを止めない。

A heavy summons lies like lead upon me,

And yet I would not sleep: merciful powers,

Restrain in me the cursed thoughts that nature

Gives way to in repose! (II. i. 5)

(睡魔の力が鉛のようにおれを押え付ける。だが眠るまい。慈悲深い神様、休息のうちにわれ知らず浮んでくる妄想を、どうもお除き下さいませよう。)

バンクウォオは、かれ自身もその子孫が代々王になるという予言を聞いていながら、ついに魔女に心を許さなかつた。かれはなるほどダンカン同様にマクベスから殺されはしたが、だからとい

てそれはかれの「有徳な行為が全く役に立たなかつた」ことにはならない。最後に彼の祈は叶えられたではないか。

マクベスがバンクウォオの警告にも拘らず、ついに悪魔の誘惑に陥入つてしまつたのは、野心よりも何よりも、彼がバンクウォオの固い信仰を持つていながつたがためである。魔女も真実を語るこゝとができると知つたとき、突然弑逆の想いが彼の心に生れ、彼を恐怖で充たし、彼の髪は逆立ち、心臓が肋骨とぶつつかり合う。

My thought, whose murder yet is but fantastical,

Shakes so my single state of man that function

Is smother'd in surmise, and nothing is

But what is not. (I. iii 139)

(心中単に弑逆を空想しただけで、わしの統一した王国は麻のように乱れて、頭の働きは妄想に圧倒され、眼に見えるものといつては、ただ幻影ばかりだ。)

これは誘惑された瞬間の衝撃によるめく魂の驚嘆すべき瞥見である。また、ここにはすでに将来の宇宙的渾沌の一切の萌芽が孕まれている。

single state of man というのは単なる比喩ではない。この state はスコットランドの state に相応し、それはまた state of the world なる macrocosm (大宇宙) に相応している。ヘリザベス朝人にとつて、state of man 即ち人間は、microcosm (小宇宙) であり、文字どほり宇宙的であつた。それを支配する

最高の能力である靈魂は宇宙の秩序を支配する神に通じ、その下位能力である情熱や欲望は動物に通じ、かくして人間は天使と動物との中間に位して、大宇宙の最高所から最低部に至る連鎖の環となつていながら、同時にそれ自体、秩序整然たる大宇宙と相応している。この神的秩序の破壊を直指するものが悪魔である。本来神に向うべき靈魂を悪魔に譲り渡すというそのことがすでに秩序の逆転であり、ここにみられるような凄まじい混乱を惹起することになる。そして、混乱は単に一個人の内部に止まるものではない。悪魔は、その橋とした人間を通じて、神への反逆を極端にまで押し進めなければ止まない。かれはマクベスにおいて、人間としてこれ以上は求められない屈強の獲物を見出したのであつた。ついに「マクベス」は「慈悲深い」そして「最も聖なる王者」ダンカンを殺し、王位を奪う。スコットランドは悪魔の支配下に陥入る。天変地異が生じ、「地獄の最も黒い煙」が国土全体を蔽い、「夜の真黒なものども」が跋扈し出し、流血は流血に次ぎ、疑惑と恐怖と苦悩の坩堝と化してしまふ。

ところで、このスコットランド一國の秩序の崩壊、暗黒と苦悩の地獄の様相は、同時にまた、それを惹き起したマクベス本人の *state of man* と相応している。せつかく目指す王冠は手に入れたのに、心の満足や平安は些かもやつてこない。絶え間もない疑念に脅かされ、恐怖に苛まれ、「心の拷問台に横たはつて、気も狂うほどに懊惱、焦慮」しなければならぬ。

O, full of scorpions is my mind, dear wife!

(III. ii. 36)

(ああ、さそりで一杯だ、わしの心は、ねえ、おまえ。)と嘆きながらも、その苦悩から逃れようがためにますます破壊への道を驀進していく。

But let the frame of things disjoint, both the worlds suffer,

Er we will eat our meal in fear and sleep

In the affliction of these terrible dreams

That shake us nightly.

(III. ii. 16)

(しかし、たとい乾坤ゆるぎ天地は碎けようとも、戦々競々として食をとり、夜な夜な心をおのかす、あんな悪夢に悩まされて眠りたくはない。)

これは墮獄の状態にあるものの、極端な演聖の言葉である。更に次の魔女への祈願においては、地獄の軍勢が常に招来しようと努めている宇宙的崩壊への積極的な意図が見られる。

Though you untie the winds and let them fight

Against the churches; though the yesty waves

Confound and swallow navigation up;

Though bladed corn be lodged and trees blown down;

Though castles topple on their warder's heads;

Though palaces and pyramids do slope

Their heads to their foundations; though the
treasure

Of nature's germens tumble all together,

Even till destruction sicken; answer me

To what I ask you.

(IV. i. 52)

(たとい貴様たちがそのために烈風を放つて、寺院を打ち倒そうとも、泡立つ怒濤が船舶を粉碎して鵜呑みにし、青い未熟の穀物が打ちのめされ、樹木が吹き倒され、城塞が番兵の頭上に崩れ落ち、宮殿と三稜台が土台まで頭をかしげ、秘蔵された万物の種子をごつた返して、ついには破壊にも厭気がさすにしたつて、わしの質問に返答してくれ。)

ここでは、地獄の勝利と天地の破壊とを更に超えてさえているある段階が心に描かれている。即ち、その破壊を通じての、隠された種子の発見である。種子は神の心の中に由来し、それ自身は破壊され得ないとしても、もしその種子を悪魔的混乱のうちにごつた返しにしてしまうならば、永久に不毛のままにさせておけるであろう。マクベスは、悪魔の意志が神の世界に終末を告げさせる時ばかりでなく、その再創造を永久に不可能にするような時について語っているのである。マクベスの全精神はミルトンのサタンと同じく破壊へと深く望みをかけている。⁽⁵⁾

ローレイのいはゆる「中心の火」が噴出するのはこの境においてである。マクベスはどこまでも人間たることを止めないのであるが、しかしかれを乗り越えて人間以上のものが前面にのさば

り出てきている。「もろもろの精力と情熱、自然力、苦悩の暗黒な深淵、等々」、とりわけ「中心の火」——すべては悪魔的な破壊を示唆している。

しかし、ここスコットランドにおける、「人間よりも偉大な」悪魔的力の噴出がどれほど凄まじいものであるうとも、更にこの力を無限に超えた神の力がイングランドを通じて働きかけてくる事実はどうして目を蔽うことができよう。

とはいえ、また、スコットランドの地獄には、確かに、われわれの心を痺らせ、陶酔を感じさせるようなものがある。そこには、ウィルソン・ナイトのいはゆる「悪魔的な美しさ」がある。また、メイスフィールドのいはゆる「天使の方にも似た雄弁」で、マクベスが不滅の詩を口にするとき、その抗し難い魅力に誰か捉えられないものがあるか。かれの言語道断な罪を絶対に許す気持にはなれないのに、深刻な同情の念は最後までこの噴火山的な人物に付き纏つて離れない。この不思議な現象の理由を、シェイクスピアの逆説的天才のせいにして流してしまうのは不当である。それはドーヴァー・ウィルソンの言葉をかりれば、「われわれ自身の罪深い自己が宇宙の無限のスクリーンの上に投げかけられているその巨大な反映」⁽⁶⁾をみせつけられるからにはかならない。それはまた、バスカルのいはゆる「神なき人間の悲惨な状態」の、極限にまで拡大された姿なのでもあつた。

過つて悪魔に捉えられたマクベスはある意味で犠牲者といえよう。絶えず兇暴な破壊へと駆り立てられていきながら、その実は彼自身の自己破壊への道をも突進しているのであつた。ちようど

かれの伴侶のマクベス夫人が、かれに倍する意志の力で一気に悪霊に充たされ、またそれだけ急速に自己を破壊してしまつたように。

だが、マクベスの演出してみせてくれる人間の巨大な否定面ばかり眩感されて、そこに逆説的に示唆されている、更に無限に巨大な肯定面へと眼を向けようとするのは、余りにも浪漫的であり、感傷的であり、ペシミスティックであるだろう。まして、ローレイのいうように、この世が「いつ、どんな瞬間に、偶然や運命などの作用によつてばらばらに崩壊してしまうかも知れない」などと考えるのは、少くとも「マクベス」に関する限り、当を得ていないのである。なぜなら、スコットランドにあの「地震」が発生したのは、マクベスが魔女——ひいては悪魔の誘惑に屈服したという明らかな原因に基いていたのであつたから。マクベスが、悪魔の破壊的意志の手先になつて「自然の大混乱」を続けていく間にも、神の摂理は次第に決定的な相貌を現してくる。マルカムはイングリランドに逃れて聖王エドワードの優遇を受け、マクダフがまたそこに出かけていつて王に縋り、援軍を求めようとしている。ある貴族がレノックスに語る。

That, by the help of these——With Him above
To ratify the work——We may again
Give to our tables meat, sleep to our nights,
Free from our feasts and banquets bloody knives,
Do faithful homage and receive free honours:
All which we pine for now.
(III. vi. 32)

(即ち、この人達の助けによつて——神この挙を嘉し給うならば——再び安んじて食卓に向い、枕を高くして夜眠り、饗応と宴会から血腥い刃物を一掃し、心からの忠誠を誓い、正當な榮譽を授かりたいと思うのだ。以上のことを今やわれわれは切に望んでいる。)

次いで、レノックスが祈る。

Some holy angel
Fly to the court of England and unfold
His message ere he come, that a swift blessing
May soon return to this our suffering country
Under a hand accursed!
(III. Vi. 45)

(聖天使よ、どうかイングリランドの宮廷へ飛んでいつて、マクダフの着かないうちにその使命を伝えて下さい。そしてたちどころに神のお恵みが、呪はれた手に苛まれているわが国にさつそく参りますように。)

絶え間もなく熱烈な祈りが続けられる。マクベスのためにその妻子が殺戮されたという悲報を聞いたとき、マクダフは次のように祈る。

But, gentle heavens,
Cut short all intermission; front to front
Bring thou this fiend of Scotland and myself;
Within my sword's length set him; if he 'scape,
Heaven forgive him too!
(IV. iii. 231)

(けれども慈悲深い神様、どうか一切の障碍を取除いて、このスコットランドの悪魔に面と向つて私を会はせて下さう。私の劍の届くところへあいつを連れてきて下さう。あいつが逃げたしきうへらひなら、神様がその罪をお赦しいなつてもいい筈。)

マルカムが答えていう。

This tune goes manly,

Come, go we to the king; our power is ready;

Our lack is nothing but our leave: Macbeth

Is ripe for shaking, and the powers above

Put on their instruments. Receive what cheer you

may:

The night is long that never finds the day.

(IV. iii. 235)

(それこそ男らしい言葉だ。さあ、陛下のところへ行こう。軍勢は整つた。後はただ陛下にお暇乞いをするだけだ。マクベスはちようど今が倒し時、天上の神様がその手先のわれわれを励まして下さる。できるだけ気持を愉快にし給え。いくら長い夜でも、そのうちには明けるものだ。)

神の手先なる軍勢がいよいよスコットランドに進撃すると、あの魔女の醸し出した朦朧たる霧に包まれた地獄の闇が次第に薄れていく。やがて、それも決然たる行動によつて決定的に吹き払われる時がくる。

The time approaches

That will with due decision make us know

What we shall say we have and what we owe.

Thought speculative their unsure hopes relate,

But certain issues strokes must arbitrate.

(V. iv. 17)

(時機は近づきました。空想は当てにならない希望を説きませんが、確実な結果は打撃によつて決しなければなりません。ですからその方に軍隊を進めるのがいいでしょう。)

これは、「キリスト教国にこれ以上老練で優れた軍人はいない」といはれるシーウォードの言葉である。

やがて明るい日の光が輝き出し、バーナムの鮮やかな緑の葉がマクベスに向つて殺到する。さしにも長かつたスコットランドの闇が、イングランドの光によつて確実に征服されていく。この燦然たる暁の陽の下では、かつての壮麗な地獄のスペクタクルも、まるで夢魔の幻覚ののうにしか思はれない。間もなくマクダフがマクベスの首を討ち取つて、マルカムが正統な王位を回復すると、ここに始めてスコットランドは健康と平和を取り戻す。これが文字どほり「マクベスの悲劇」の結末なのであり、この平常で静かな秩序の再生に、ローレイがいうような「惑はしい」ものは何ひとつ感じられない。

What's more to do,

Which would be planted newly with the time,

As calling home our exiled friends abroad
That fled the snares of watchful tyranny;
Producing forth the cruel ministers
Of this dead butcher and his fiend-like queen,
Who, as 'tis thought, by self and violent hands
Took off her life; this, and what needful else
That calls upon us, by the grace of Grace,
We will perform in measure, time and place.

(V. viii. 64)

(さらにそれ以上の仕事、即ち時とともに新たに着手しなければならぬこと、例えば眼を光らす暴君の陥穽を逃れて外国に流浪した味方の者を本国に呼び戻すとか、いまは死んだこの屠殺者と、自分の手で無慙にも命を絶つたといはれるその悪魔のような妃のために残酷な手先となつた者どもを探し出すとか、こうしたことや、その他自分に要求される必要な事柄は、慈悲深い神様のお恵みによつて、適度に、時間と場所を考へて実行しよう。)

このマルカムの幕切れの演説、とくに *by the grace of Grace, we will perform in measure, time and place* の一句、には深い確信に裏打ちされた揺ぎない落ちつきが感得されるであろう。それにしても、マクベス夫妻への、「この死んだ屠殺者とその悪魔のような妃」という呼び掛けは、ひとによつては酷に失すると感じられるでもあろう。たとえばドーヴァー・ウィルソンは、それがかれらに与えられた「この世の墓碑銘」であるが、「われわ

れはそれ以上のことを知っているのだ」といつて、この主人公達に畏怖せしめられ、讃嘆せしめられ、共感せしめられた印象を尊重し、「この世」の散文的な評価に反撥している。だが、かれのいはゆる「この世の墓碑銘」は、マクベスに「天使の舌にも似た雄弁」を与えたその同じシェイクスピアの手によつて、マルカムの口に与えられたものではなかつたか。

マクベスは、魔女が真実を予言するものであるかのような致命的な錯覚に陥つた。窮極の真実の光によつて照し出されてくるにしたがつて、この英雄の姿はますます見窄らしいものとなつていき、ついに「巨人の衣をまとつた一寸法師」になり、「屠殺者」になり果てる。これがマクベスの悲劇である。

「この世の墓碑銘」——だが、やはり、ドーヴァー・ウィルソンの直覚は當つていたのであつて、マルカムの君臨する世界は直接この世に通じているといえよう。しかし、シェイクスピアは観客があつた「地震」によつて劇しく震撼させられることを期待したのであろうが、その中に埋没してしまつて、「この世」を果敢なむような結果に陥入ることは決して希望しなかつたに違いない。むしろ逆に、震撼の度が強烈であればあるだけ、それだけ、この世の、あまりにも身近いがために、われわれが見失つてゐる、秩序正しい平和な生活の貴重さを、眼を洗つて見直して貰いたかつたのであろう。これこそこの深刻な悲劇がわれわれに与えてくれる真の浄化作用でなければならぬ。

ハーディン・クレイグが、この幕切れについて、次のような興味深い説明を与えている。

「エリザベス朝時代の舞台は野外にあつた。そして、劇は、決して幕が下りて終るのではなかつた。シェイクスピアはこの欠陥（もしそれが欠陥といえるならば）をかれ独特のやり方で利用した。そしてそれをかれの確信を表明するために用いた。かれの確信とは次のようなものであつた。即ち、この世は神の世界であり、人生とは忍耐して勞苦するに足る営みである」と。⁽⁸⁾

註

- (1) Walter Raleigh, *Shakespeare*, 1907, pp. 196—7.
- (2) *Macbeth*, ed. John Dover Wilson, 1951, Introduction p. 66.
- (3) Hardin Craig, *Maturation in Shakespeare's Choice of Materials*. ('Shakespeare Survey' 4, ed. Alardyce Nicoll, 1951, pp. 31—32)
- (4) E. M. W. Tillyard, *The Elizabethan World Picture*, 1952, *Shakespeare's History Plays*, 1947; Theodore Spencer, *Shakespeare and the Nature of Man*, 1949. 參照。
- (5) John Dover Wilson, *op. cit.*, pp. 62—64. 參照。
- (6) *Ibid.*, p. 68.
- (7) *Ibid.*, pp. 67—68.
- (8) Hardin Craig, *An Interpretation of Shakespeare* 1949, p. 267.